

## 5) 神経内分泌への分化を示す乳癌

竹田 雅司 先生  
(八尾市立病院・病理診断科)

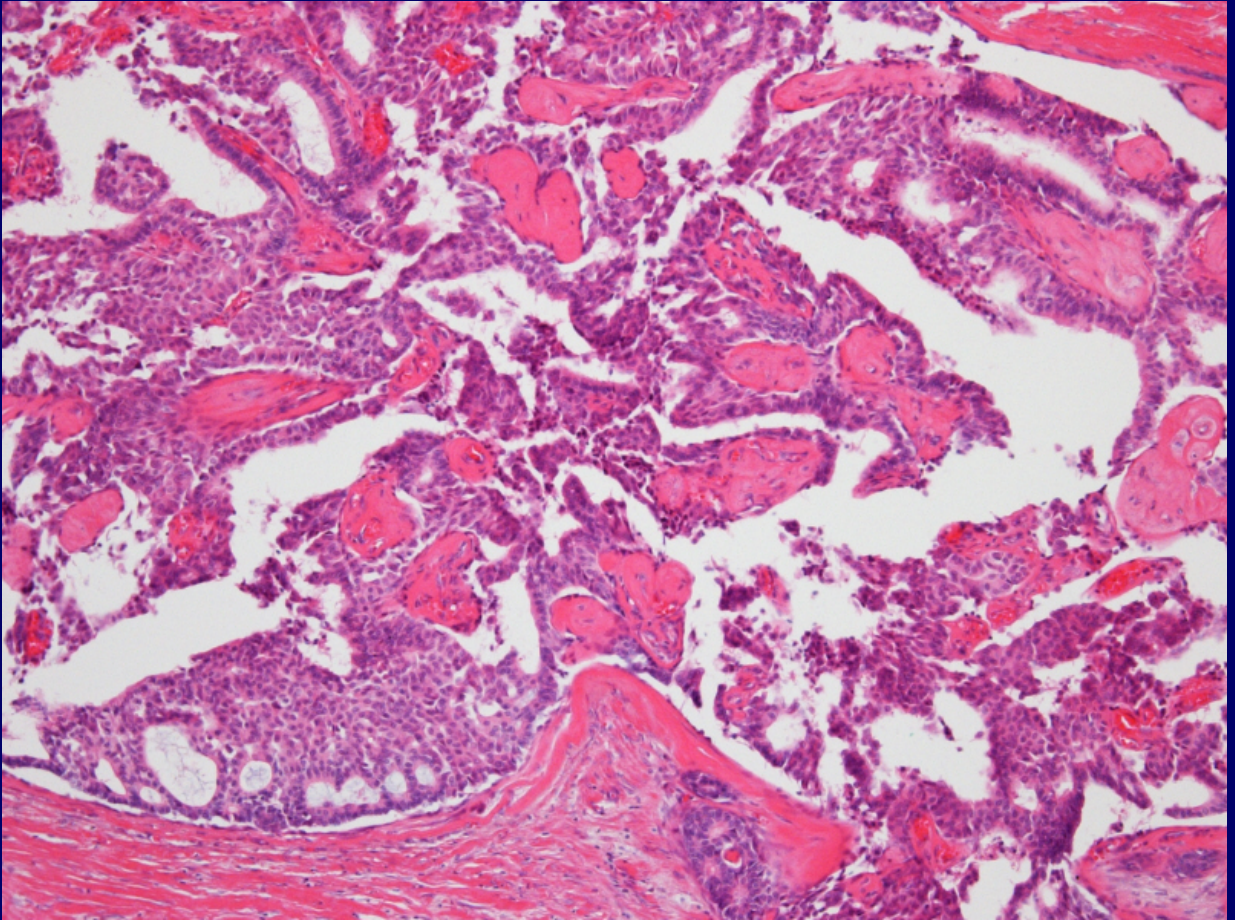
神経内分泌への分化を示す腫瘍は消化管・呼吸器をはじめ全身各臓器に発生するが、乳腺においても例外ではない。浸潤性乳管癌においては神経内分泌への分化の有無は治療方針に影響を及ぼさないためあまり検索されていないのが実情である。しかし、非浸潤性乳管癌では神経内分泌の表現形を示すことが悪性の指標となるためその有無が良悪の鑑別上重要となる場合がある。最近約2年間に八尾市立病院・大阪医療センターにおいて診断した乳癌のうち HE 染色標本にて神経内分泌分化を疑い、免疫組織染色にてその分化を確認できた症例からその組織学的特徴について提示する。

浸潤性乳管癌は8例で神経内分泌への分化が確認した。臨床的には、多くが「粘液癌の疑い」「軟らかい腫瘍」という表現で検体が提出されていた。組織学的には、比較的均一な類円形核と好酸性でやや顆粒状の細胞質をもつ細胞がシート状～髄様に増殖する像を示すものが多い。核が偏在し、形質細胞様の形態を示す腫瘍細胞の混在もみられる。また、部分的には粘液産生を伴い粘液癌との区別が困難なものも含まれているが典型的な粘液癌とはやや像が異なっている。

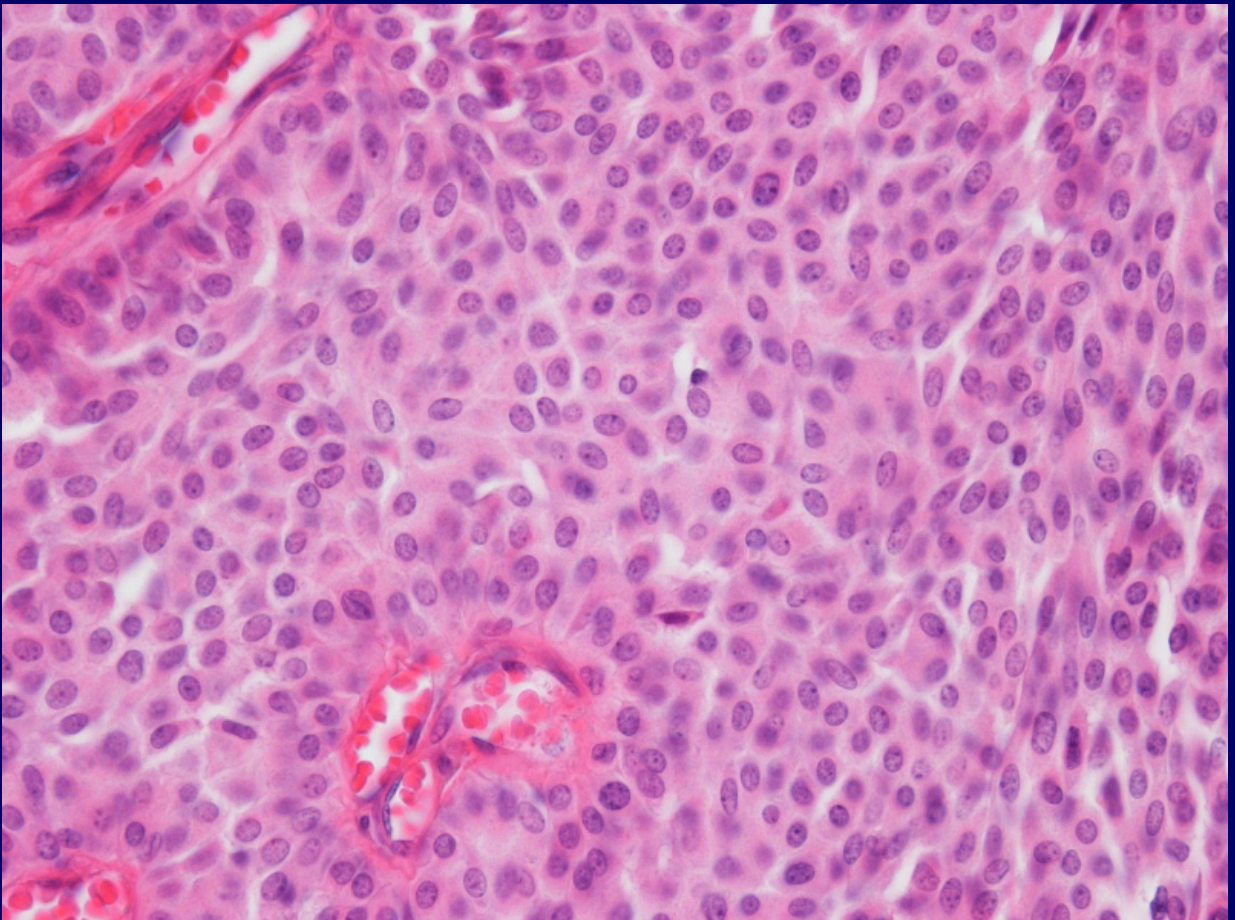
上記細胞像に着目することにより乳管内増殖性病変の良悪の鑑別が可能な場合がある。Solid papillary pattern を示す乳管内病変は、組織像が多彩で、間質を伴った乳頭構造やスリット状の管腔形成など乳頭腫との鑑別が困難なことが多い。このような病変に対し、上記の浸潤癌にみられるものに類似する細胞の充実性増殖部分の存在や、粘液産生細胞の混在が悪性を疑う指標となる。それらに着目し、シナプトフィジン、クロモグラニン A、CD56 の免疫染色を施行することで、神経内分泌への分化の有無を確認することが重要といえる。良性の乳管内乳頭腫では神経内分泌分化はほとんどないと考えられており、神経内分泌分化を証明することが悪性の診断につながる。

繰り返しになるが、浸潤性乳管癌においては神経内分泌分化の有無は治療方針に影響を与えないため、神経内分泌分化を検索することは临床上の有用性に乏しい。しかしながら、その細胞像が念頭にあれば、乳管内増殖性病変の良悪鑑別に有用な場合がある。

## 1. 乳管内病變 HE



## 2. 乳管内病變 HE



### 3. 乳管内病変 シナプトフィジン

